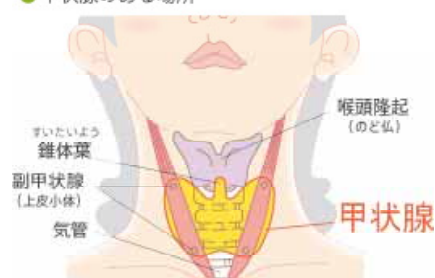


伝子マーカーが発見されたのです。

放射線被曝したことを示す甲状腺癌の遺伝子が発見、遺伝子マーカー、いわゆる「甲状腺被曝指紋」とも言うべき画期的な発見で、チェリノブイリ原発事故被災者の甲状腺乳頭癌患者のみに認められ、放射線被曝のない患者の甲状腺癌には認められなかった。

HZM 研究センター放射線細胞遺伝学班のホルスト・ジゼルスベイガー教授とクリスチャン・ウンガー博士の率いる研究チームは、インペリアル・カレッジ・ロンドンのジェラルディン・トマス教授と協同して、チリノブイリ原発事故による放射性ヨウ素降下物に被曝した児童の甲状腺癌を研究、これらの腫瘍から得られた遺伝子情報と、放射性ヨウ素が崩壊した後、爆発事故 1 年以内に生まれた児童に発症した同タイプの腫瘍に見付けた遺伝子情報と比較し、第七先染色体の小片のコピー数は、放射線被曝した児童の腫瘍にのみ増加がみとめられた。これは癌の放射線病因論を示す初めての遺伝子マーカーの一つであることが立証された。

● 甲状腺のある場所



放射線と甲状腺癌との因果関係は、事故によって大量に放出された、放射性ヨウ素 131 等のヨウ素(半減期 8 日)による被曝で、甲状腺ではヨウ素を原料として甲状腺ホルモンの合成が行われるため、体内に摂取された放射性ヨウ素の殆ど全ては甲状腺に集まるので、事故当時、急速に取り込まれた放射性ヨウ素が甲状腺に取り込まれ、内部被曝の結果が甲状腺癌に繋がったとされました、と説明されましたが、ヨウ素の半減期が 8 日ですから、さらに研究の結果は、放射能に汚染された飼料を摂取した乳牛のミルクやバター、チーズ等の乳製品を摂取したことが原因ではないかと言われています。確かにこの辺は酪農地帯で、昔からの習慣で乳性製品の摂取量は多いようです。

もう一つの原因は、甲状腺はヨウ素を取り込む働きと、それを蓄えておく働きがありますが、自然のヨウ素を多く含む海草類の摂取量が少ないので、甲状腺は放射線ヨウ素を急速に取り込んだのではないかとされています。この辺は内陸国ですから海草類を食べる習慣はありません。(自然にあるヨウ素と放射性ヨウ素を区別して下さい)

我が国は海草類を多く食しますから少し安心だといわれています。

不幸にして、甲状腺癌が発症し手術をした患者に、さらなる不幸に巻き込まれました。それは子供の手術に大人用のメスで執刀したもので首に大きな手術痕が残ってしまい、また医学的水準もやや低かったため、必要以上に大きく切り開いてのオペだったようです。



そこで立ち上がった日本人医師がおります。

信州大学医学部付属病院・甲状腺専門医 菅谷明氏です。

信州大学医学部卒業後、同付属病院医師と同大准教授を務め、甲状腺癌の専門医としての確固たる地位を築いていたのですが、ベラルーシの悲惨な状況を知り、1991 年、25 年間勤めて築いた全ての役職を捨て、退職してから自費で単身ベラルーシへ行きボランティア医師として働き始めたのです。